

(そんなの嫌だ)

とつきにそう思う。そんな権利などないのに。

臨也は女性人気がある。臨也だって女性の方が好きだろう。

ただ、たまたま今は気まぐれで帝人相手に恋人ごっこに興じてただけだ。そんなこと、わかっていたのに。

(それなのに、ショック受けてる。変なの)

くすりと自嘲の笑みを浮かべた。そうだ。すべて、わかりきっていたことなのに。

そろそろ、恋人ごっこを始めて一ヶ月になろうとしている。つまりは、そろそろ頃合い、潮時なのだろう。来るべき時が来たただけだ。

次に逢ったときに、最後にしよう。臨也から言い出せば頷くだけだし、言わないならば自分から言うべきだ。

(だってもう、限界だ)

あんな瞬間に、二度と居合わせたくない。関係が終わった後ならば、きつと当然のことだと諦めもつく。けれど形だけでも恋人の今は、どうしようもない感情の嵐が自分の中で吹き荒れてしまう。彼にとつてはごっこ遊びと理解していても、その嵐はおさまらない。

そのときが来ることを覚悟しながら恐れていた。それは今も変わらない。けれど、だからこそ思う。自分の気持ちに気づいたときに、自分からこの関係に終止符を打つべきだった。だってたぶん、今の自分は自分の気持ちに気づいた時よりもさらに深く臨也に惹かれている。恋している。

嫉妬なんてみっともないし、する権利もないのにせずにはいられない。そんな自分が心底嫌だった。

自分は居心地の良い夢を見ようとして、そして現実を目の当たりにした。それだけのことだ。そうだ。現実を受け入れなければならぬ。ごっこ遊びは、もう終わりしよう。(大丈夫)

終わる覚悟はできていた。それを自分から言い出す度胸はずっとなかったけれど、今ならば、言える。そうだ。言わなければならぬ。

深く、息を吸う。それから、メールを打とう、と思った。逢いたいです、いつ逢えますか。打つのはそれだけで良い。臨也の都合が良い日に逢って、その日で終わりにしよう。そう決めた。



臨也の返信はすぐだった。指定日はメールの翌日。マンションに来るようにと時間を指定され、了承する。

授業が終わり次第、急いで液へ向かって彼のマンションへと向かった。これで最後だと思うと、少しばかりセンチメンタルな気分になる。

「帝人君から逢いたいって連絡くれるなんて初めてだよね」
迎え入れた臨也は微笑を浮かべ、そう言った。

「そうでしたっけ？」

「そうだよ。いつも俺が逢いたいって連絡してた」